

国分寺市委託事業 国分寺重層的支援体制整備事業講演会  
「不登校・ひきこもりの居場所について」第1部講演講師質問の回答



Q1. 当事者スタッフの体調管理も大切だと思います。体調管理の維持のために当事者スタッフやコーディネーターは何か工夫されていますか？

【割田】

スタッフ自身も当事者なので、運営だけを行うのではなく一人の参加者として当事者会などで楽しく過ごしてほしいと思います。具体的に何か工夫しているわけではないですが、少なくともスタッフ内で亀裂や対立など人間関係のこじれがないことが継続のうえで欠かせないと思います。

【地域福祉 Co】

支援者も支援を行う中で悩んだり、不安を抱えることは多くあるため、一人で悩んだり抱えこまないように、同僚や上司などと話し合えるような環境を作り、心の体調管理に気をつけています。

Q2. 居場所などを経験して、成功したなあと思う事例があればお話しください。

【割田】

「顔色が良くなった」「元気になった」という印象を持った方がいます。また、数年ぶりに参加してくれる方もいます。決して支援のために運営しているわけではないですが、当事者会を大事に思ってくれる人が一人でもいらっしゃるの、運営者としてとても嬉しいです。

Q3. 不登校、ひきこもりの方は増えていますか？増えているのなら、居場所を増やし続けるだけでは、解決しないのではないかと？学校や社会の在り方を考える必要があるのではないかと？思いますが、どのようにお考えになりますか？誰もが自分に合った居場所を選択できるような社会になれば、ひきこもりは減りますか？

【割田】

統計的なことは今までの調査結果を参照する必要がありますが、個人的な感覚では不登校またはひきこもり状態にある方は増えていると感じます。また、おっしゃる通り学校や社会の在り方が変わらなければ根本的な生きづらさ解消にはつながらないと考えています。居場所を増やすというのは今の社会の置かれた環境下で、一部の人がなんとか行っている工夫の一つだと思います。よって、学校や社会が今の状態のままであれば、一部の人が頑張っても生きづらさが緩和する人は限定的で、今後も生きづらさゆえに自殺を選ぶ人が後を絶たないでしょう。生きやすさの確保のために、自分に合う居場所を選択できることはとても大事だと思います。自分自身ひきこもり自体が特に悪いことではないと考えているため、ひきこもり状態にある人が減るかどうかという見込みについてはあまり気にしていません。しかし一人ひとりが「生きていい」と思えるような環境づくりが整っていくことで、少しでも生きづらさが緩和してほしいと切に願っています。

Q4. 経費は、寄付や会費でまかなえている状況ですか？

【割田】

残念ながら寄付・会費のみでは経費を賄うことができていません。しかし今まで8年半の間にご寄付・応援いただいた方、および関心を持ってくださった方には誠に感謝しております。実際のところ参加費を上げることは当事者の負担を増やすことになるため、参加費を抑えながら経費を賄う程度の収入を確保することが大事だと考えています。そのため、皆様からのご寄付・ご支援を心よりお待ちしております。ひき桜では以下ページからひき桜の方針や寄付などのご案内を掲載していますので、ぜひご覧いただければ幸いです。<https://x.gd/nzAKm>

Q5. 長くひきこもる青年たちは、人との出会いを期待する人たちなのでしょうか？

【丸山】

必ずしも期待しているとはかぎらないと感じています。いくら居場所が増えても、行きたくない人が絶えることはないでしょう。そこで、そういう人には人と出会うことではなく独りで生きていくことを支援するべきだと思います。もちろん、孤立無援で買い物もせず病気になっても受診しなくていいということではありません。そのような生きていくために必要な最低限の行動は自分でできる、あるいは人にやってもらえる、という生き方が目標になります。そういうふうに住生活だけを支援してくれる人がいたら、そういう人たちも出会ってよかったと思えるのではないのでしょうか。

Q6. 誰とも関われない家族とも不仲。PC やスマホさえなく、電話も出られないこの様な方への対応、支援についてお考えがあれば聞かせていただきたく存じます。

【丸山】

家族が本人の心理を理解し接し方が変われば本人が変わるかもしれないと考えられる場合は、家族相談をどれだけ継続できるかがカギになります。また、家族から相談を受ける人と本人にアプローチする人を別にする複数担当制が望ましいです(私が関わっている藤沢市社会福祉協議会でもそういうケースがあります)。そのうえで、本人が電話に出られなくてもメールなどネット経由なら人と連絡できるのであればネット環境を整える、どのようなひきこもり生活を望んでいるのかを探ってそれを実現するよう支援する、といった、本人の現状に合わせた対応・支援が大切だと感じます。

Q7. 精神の家族会さんとの連携はありますか？精神の家族会さんとの連携は必要ないでしょうか？抵抗感等がありますか？お隣の小金井市では、ひきこもり家族会と精神の家族会がゆるく連携しはじめています。

【丸山】

ひきこもり状態には、発達障害者や精神障害者が含まれます。そのため、ひきこもりを対象にした当事者会にも家族会にも、話が合わないとか理解されないとか感じる方がいて、そういう方が参加しなくなるという現象が起きていると考えられます。そこで、お互いに情報交換したり参加者に紹介し合ったりするといった連携が必要だと思います。

Q8. 質問ではないのですが、丸山さんが考える「早期発見」のお話しをして下さると嬉しいです。

【丸山】

当事者は、自分を支援者に「発見されたくない」と思っている人が少なくありません。そのため、よく言われる「早期発見」という言葉は、そういう方々には恐怖の言葉と感じられることがあります。そこで私は「本人“を”早期発見する」こと以上に「本人“が”早期発見する」ことが容易になるよう努めることが重要だと主張しています。本人が何を早期発見するのかと言うと、このイベントのテーマの「当事者会」のような居場所になる場所や自分が必要だと感じる場所あるいは情報、ということです。支援側は、そのための情報提供の仕組みづくり、たとえば支援機関と当事者会やイベントの情報を対等に発信する、アクセスしやすい情報サイトを構築する、図書館や公園や公共施設などの情報や、ひきこもり生活の困りごとを解決するのに役立ったりひきこもりながらにして楽しめたりする情報を発信する、等々いろいろな手立てを講じることにより、当事者ができるだけ早く自らの意思で動きやすくなる(これが当事者にとっての早期対応)ような、間接的な支援にご尽力いただきたいと願っています。